

人の命には限りがある
だから自分の思うように生きたい
人は軽く、十年先、二十年先を口にすれば
そのときを大切にしなければ
今、光っていたい

昭和60年8月12日、日航機墜落事故で田中愛子さんは帰らぬ人となりました。父：田中蔚（しげる）さんが、亡き娘さんの遺品を整理していたとき、愛子さんの大学ノートから1枚の便せんが舞い落ちました。これは愛子さんが生前に遺した最後の詩（絶筆）となりました。

事故は凄惨を極め想像を絶していた。遺体の中を捜し求めてわが子にやっと巡り合えたのは7日目であった。

「どんなに変わり果てた姿であろうと、せめて一晩我が家の畳の上に寝かせてから葬ってやりたい。」という妻を説いて遠い高崎の地でだびに付した。来春の結婚に夢見たであろうウエディングドレスを着せ、好きだったテニスのボールを左手に握らせて……。

一条の煙とともに白骨と化したその遺骨を抱きしめたとき、とめどなく流れる涙と共に「よう帰ってきたのう」と思わずほほえんだ私。

一緒に同道した婚約者の姿がいじらしかった。彼はこの事故の1ヵ月ほど前に「愛子さんとの結婚を認めてください。」と我が家を訪れた。「うちは同和地区ですよ。」「愛子さんから聞いています。両親がお盆にお願いにくる筈です。」

これが彼と交わした最初の会話であった。そして、奇しくも遺体収容の体育館で両家の親が対面した。私が同和問題に触れた時、お父さんは「私は教師です。少なくとも人様に平等を説く人間として自分を偽るようなことはようしません。」といわれた。私は返す言葉もなかった。……

しげる
（『娘の遺してくれたもの』田中蔚 著から抜粋）

亡くなられた愛子さんは、中学時代に差別を受けて、己自身を磨こうと「一日一生涯」という言葉を卒業アルバムに残されています。愛子さんは生前、ほとんど「同和」や「平等」を口にすることはなかったそうですが、愛子さんの父親は、この詩に差別問題を乗り越え、今を大切に生きる愛子さんの強い意志を感じ取られました。

改めてわたしたちの生き方も考えさせられますね。